

趣旨 第2セッション：農村景観の形成

農村景観、あるいは非都市的景観の研究は歴史地理学にとって長い伝統と多くの研究蓄積を有してきた分野である。農村景観は面としては都市景観よりも広い範囲をさすことが多い。また都市景観よりもその変化が緩慢でかつ持続的で、分析・考察にあたっては、対象の内的連関をとらえるのみならず、外的な諸要素と接触・衝突・融合などを繰り返しながら変化していく存在である。本セッションでは農村景観の形成・起源の問題を東南アジアの2つの事例と新大陸に導入された食用作物から考える。

本セッションでは非ヨーロッパ世界を対象としたルーラルな対象を扱った3つの話題をベトナム、シンガポール、アメリカ合衆国の若手・中堅研究者が行う。3つの発表のうち、前2つは東南アジアのルーラルな空間を扱う。前者は大陸部東南アジアの中でも領域観念や村の自立性の強い北部ベトナムの平地農村で、後者はマレー世界を中心とした島嶼部東南アジアに力点がある。

第1論文はベトナム国家大学ハノイ校でこれから人文地理学をもり立てていこうとする若手研究者の発表である。紅河（ホン川）デルタの海面干拓のプロセスを、北部ベトナムの土地支配制度の中に位置づけながら、デルタの中で最も人口密度が高い地区であるタイビン省ティエンハイ県の19世紀前半沿岸開拓の歴史地理的過程の分析から考察する。潮汐デルタの干拓技術の特性や土地配分の方法を中心に、オーソドックスな継起する景観変化の手法で論じた。史料操作などにはまだまだ未熟な箇所も散見されるが、旧ソ連の自然地理学が中心であった世代に教育を受けながら、人文地理学、歴史地理学の手法を日本で学び、これからベトナムに根付かせていこうとする新しい世代の登場として受け止めても

raitai。また、躍進する開放ベトナムの土地使用権をめぐる地域計画、土地管理の解決の基礎ともなる現代的要請も本報告には包含されている。

第2論文は国立シンガポール大学で国際学術雑誌*Singapore Journal of Tropical Geography*（もとの*Journal of Tropical Geography*）の編集に中心的に関わってきたサヴェジ氏の島嶼部東南アジア、とりわけマレー世界を中心とした歴史空間論である。カリフォルニア大学バークレー校でアメリカ文化地理学の自然と人間関係のよき伝統を若き日に学んだ氏が、先史時代から植民地空間までの長い時間軸で東南アジア世界を考察した。その結論は、東南アジアの先史社会の共同体も歴史時代の多くの社会も移動性が大きく、非空間的、没場所的、非領域的であり、土地に関する個人的権利や経済的価値、所有観念は希薄であったという。領域的観念は植民地主義以降になって現れた観念であるという、近代地理学の逆説が成立する世界であった。換言すれば、王権はその中心（首都、王宮）の政治的・精神的維持のみに力が注がれ、外縁としての領土への関心は可変的かつ二次的であった。その要因を氏は人口希薄と土地の過剰に求める。二次資料による歴史地理パースペクティブを得ることを一義的に考えた発表で、先史時代の狩猟採集、焼畑社会、農民社会、インド化した王権、植民地主義と空間社会の5つの時代の比較対照が目新しい。

第3論文は発表者の都合で急遽来日が無理となったため、そのプロシーディングーパーだけをここに掲載する。彼女もサヴェジ氏と同じく、カリフォルニア大学バークレー校の文化地理学の学派に属する。コロンブスに始まる大航海時代は新大陸起源のジャガイモやトウモロコシ、トウガラシが旧大陸に持

ち込まれて食生活や農業体系が大きく変わったことはよく知られているが、この発表は逆に旧世界から新世界に移入された栽培植物を扱う。黒人奴隷の新大陸への移入によって、彼らの食を満たす食用植物がアフリカから新

大陸にもたらされた。そのプロセスを名称（地名を冠するか否か）や図像資料などから論じたものである。遺伝学・育種学以外のアプローチの可能性を模索した試みと位置づけられる。

（野間晴雄）